1Gp-5

児童の靴の大きさおよび履き方と歩容の関係

○春日　綾*　　大村知子**　　(*静岡大・院、**静岡大)

目的　成長期の児童が大きめの靴を履くことが知られているが、このことがその歩容に与える影響に関する報告はほとんど見あたらない。そこで、本研究では児童の生活活動に適した靴選びや靴の履き方の基礎的資料を得ることを目的とし、歩容に関する実験を行い、靴のサイズの大小や着靴状況と歩容の関係の有無について検討を試みた。

方法　被験者は小学校2、4、5、6年の健康な女児5名で、平坦地の歩行と階段の昇降を行った（1996年11月）。着靴条件はいつも履いているサイズの靴とそれよりも1サイズ大きい靴について甲部をひもで固定して履いた場合と固定せずに履いた場合とを組み合わせ4パターンを設定した。被験者の右側面・正面・背面からのビデオ撮影により歩行記録を取った。今回の研究項目は頭頂点・肩先点・膝点・踵点・足先点の5点の軌跡と手の振りおよび足首角度である。

結果　ジャストフィットサイズの靴でも甲部を充分に固定せずに履いた場合は、平坦地歩行においても身体全体の上下動が大きくなり、1歩行周期における軌跡間の間隔にばらつきが多く歩行速度が不安定であり、階段昇降時には上体では上下動が、膝と踵では上下動や歩行速度のばらつきが現れた。1サイズ大きい靴を甲部に固定して履いた場合、平坦地歩行時では、低学年の被験者の上体の上下動が大きく出現し歩容が不安定で、下腿の軌跡は全被験者とも一定間隔ではなく、歩行速度にばらつきが大きかった。階段昇降時より平坦地歩行時の方が、また、高学年より低学年の方が靴サイズの不適合や甲部固定の有無の影響が大きいことがわかった。